

# ブルデュー以後の文学社会学

——「場」の理論を用いた作品分析のために——

慶應義塾大学 松下優一

## 1 目的

この報告の目的は、P・ブルデューが提示した「場」の概念による文学作品の社会学的分析（「文学場 *champ littéraire*」の理論）が孕む問題点について検討することである。文学社会学の基本的課題は、対象となる文学テキストが、多様にありうる形式上の選択肢から他ならぬその形式を選択している理由を、社会的文脈との関係で説明することである。文学場の理論は、こうした課題に応えるものとして提起されている。『芸術の規則』の邦訳（1995年）以来、日本の文学研究者たちのあいだでも「文学場」という用語自体はよく知られたものとなっているが、フランス語圏と比べた場合、作品理解の社会学的枠組みとして積極的に援用されてきたとは言いがたい。場の理論で具体的素材を分析していく際、どのような問題が伴い、それはいかに克服しないしは回避することができるのか。

## 2 方法

本報告では、場の理論を具体的な作品なり文学現象に適用し、説明しようとする場合に、どのような難点が伴うことになるのかについて、ブルデューの「作品の科学」を批判的に継承しようとする Geoffroy de Lagasnerie（2011）の議論を手がかりに検討したい。

## 3 結果

文学作品を社会的文脈との関係で理解することが文学社会学の課題であるとして、その場合「社会的文脈」なるものをどこにどう設定するのかという問題が付随している。作品をそれに結び付けて理解すべき文脈は、マルクス主義的アプローチでは社会集団、サルトル的な伝記的アプローチでは作家の家庭環境・生育環境となるわけだが、こうしたアプローチに対しブルデューが文脈として設定しようとするのが、作品生産にかかわる専門家たちが形成している自律的な社会圏域（文学生産ならば「文学場」、哲学生産ならば「哲学場」）である。しかしながら Lagasnerie によれば、場の理論においても、そこに作品を結びつけて理解すべき「場」の境界をいかに画定するかという問題は未決であり、場の理論を具体的な作品等に適用しようとする場合、専門家たちが形成する場へと排他的に作品を結びつける還元論的説明に陥りがちであるという。

## 4 結論

場の理論による作品理解の方法は、高度な自律性を獲得した場を前提する場合においては相応の妥当性をもつといえる。しかし、あらゆる作品生産の場面について無条件に適用可能であるとは限らないし、この理論が機械的に適用される場合、例えば生産者が別の場に同時参加している可能性、その作品が別の場の規定も受けているという可能性を看過しかねない。こうした問題は、とりわけ、歴史的地理的に境界的な時間・場所（文学場の自律性が低い状態）における文学生産を考察する場合に際立ったものとなりうる。

## 文献

Geoffroy de Lagasnerie, 2011, *Sur la Science des œuvres : Questions à Pierre Bourdieu (et à quelques autres)*, Éditions Cartouche.